

ウォリントン・アカデミー (1757-86年) の学生たち

—社会的出自、学生生活、進路についての分析—

三 時 眞貴子

(2001年9月28日受理)

The Students of the Warrington Academy 1757-86:
the Analysis on Their Origins, Life in the Academy and Social Status

Makiko Santoki

In 1757 the Warrington Academy founded as one of the voluntary associations which were founded in Eighteenth-Century and Nineteenth-Century in great numbers. This paper's aim is to reveal on 396 students from the variety views. Most of the students were sons of richer men (peers, gentry, marchants, bankers and professions). The students came from many parts of England, domantions and colonies and to the academy from 10 to 22 years old. The Warrington Academy offered two courses, one was the regular course for the students intended for any of learned professions for five years, other was for the students for designed for life of public business or commerce for three years. But both of students mainly left for one or two years. After the students left the academy, most of the students became busines men and professions. And some of the students went to the Universities including Oxbridge.

The Warrington Academy was a place to educate young men intended for professions and designed for a life of commerce; indeed, had produced the professions and business men; had produced some people who had the power in their countries.

Key Word : Warrington Academy, student, voluntary association, profession, marchant, banker, gentry

キーワード：ウォリントン・アカデミー、学生、任意団体、専門職、商人、銀行家、ジェントリ

1. はじめに

ウォリントン・アカデミー(Warrington Academy 1757-86年)は、1757年、イングランド北西部に位置するウォリントンに開設された非国教徒アカデミーの一つであったが、それまでのものとは様々な点で大きく異なっていた。最も顕著な違いは、従来のアカデミーが教師個人によるプライベート・アカデミーであったのに対して、ウォリントン・アカデミーは、アカデミーの教育や設立の理念に賛同する人々が集まり、その中で組織した理事会(Trustees)が明文化された規約に基づいて、自発的な会費や寄付を信託基金として運営する任意団体(voluntary association)として設立されたことであった⁽¹⁾。

ウォリントン・アカデミーが設立された18世紀後半

のイングランドは「商業革命」から「産業革命」へと至る途上にあり、16世紀には限られた人数しかいなかったといわれている実業家や専門職の人々もこの頃にはかなりの規模となっていた。17世紀後半以降の「商業革命」による急激なイングランド経済の発展は、彼らや貴族・ジェントリたちに余剰の富をもたらした。この経済的繁栄を基盤として、「地方文化とも民衆文化とも違う独特の都市文化」⁽²⁾がロンドンを中心に花開いた。都市において道路の整備や広場の造営、照明、浄化設備の改善などが行われ、コンサートや演劇、展示会、スポーツ大会などの文化・娯楽イベントが活発に開催された。また多数の新聞や雑誌などが出版され、クラブや図書館(室)、文芸・科学に関する協会、病院などが数多く設立された。これらの団体の多くが、信託である任意団体として設立され、上述の道路の整備や浄

化設備の改善なども信託方式で行われた⁽³⁾。こうした活動の中には公共の利益を目的としていたものも多数あり、パブリックへの関心が高まる18世紀後半には国教徒だけではなく多くの非国教徒が信託を利用して公共の利益のための活動を行った⁽⁴⁾。

ウォリントン・アカデミーの設立もまた、公共の利益のために行われたものであった。アカデミー設立への支持を得るために配られた「規約案」⁽⁵⁾には、アカデミーの設立計画が公益目的であることが明記されており、実際、賛同の意を表明した人々の多くがこの点を高く評価していた⁽⁶⁾。彼らはまた、「市民的・宗教的自由(Civil and Religious Liberty)を重要視しており、自由を尊重した人々が結集して公共のための活動に従事することこそが自由を実践することだと考えていた。さらにそうした活動の中で子弟たちが学べば自然と自由の精神を身につけることができる」とも考えていた。だからこそ、彼らは従来のプライベート・アカデミーとは違う、彼らの言葉でいえばパブリック・アカデミーとしてウォリントン・アカデミーを設立した⁽⁷⁾。

同アカデミーの目的は、「専門職(learned profession)と同様に商業生活に従事しようとする若きジェントルマン」に「リベラル・エデュケーション」を提供することであり、「あらゆる人々」に対して門戸を開くとしていた⁽⁸⁾。そもそも、非国教徒アカデミーは、公職や聖職から追い出され大学への道も閉ざされた非国教徒が、自宗派の聖職者養成を目的として設立した教育機関であった。非国教徒でありながら公職に就く者も多数存在していた⁽⁹⁾18世紀には、聖職以外の専門職や実業家を目指す学生もアカデミーで学ぶようになっていた。とはいえ、これらのアカデミーの多くは、たいてい教師が一人で教えていたため複数のコースを提供することはできず、基本的には聖職志望の学生を主たる対象としていた。それに対して、ウォリントン・アカデミーは、複数の優秀な教師を雇い、専門職コースと実業コースの二つを設け、それぞれにあった教育を提供しようとしたのであった。

従来とは違うパブリック・アカデミーとして設立されたウォリントン・アカデミーが、専門職と実業家を目指す若者を教育の対象にしており、その門戸を「あらゆる人々」に開くとしていたことは先行研究でも述べられてきた。しかしながら、実際、アカデミーが開校していた29年間に入学した396名⁽¹⁰⁾の学生が一体どのような人々であったのかについては、これまで部分的、個別的にしか明らかにされてこなかった。アカデミーに入学した学生396名はどのような人々であったのだろうか。彼らはどんな学生生活を送ったのだろうか。アカデミーの目的通り、専門職や商業関係の職に就いた

のだろうか。

ウォリントン・アカデミーに入学した学生についてはアカデミーの学生名簿⁽¹¹⁾が現存しており、その名簿と同アカデミー出身者のウィリアム・ターナーが進路を調査した学生リスト⁽¹²⁾の二つが基本的な史料である。これらの史料をもとにこれまでも学生に関する研究は行われてきた⁽¹³⁾。しかしながら、それらの多くは、一部の有名な学生に関する記述であったり、進路のみを分析対象にしたものであったりなど部分的・個別的な分析となっており、出自、出身地、入学年齢、在学期間、進路など幅広い観点から分析したものは見当たらない。ウォリントン・アカデミーで学んだ学生がどのような人々であったのかを明らかにするためには上述のような幅広い観点からの分析が必要である。

以上のような問題関心から、本論文ではウォリントン・アカデミーが開校していた1757年から86年までの29年間に学んだ全学生396名を対象にして、彼らの社会的出自、学生生活、進路について具体的に明らかにする。その際、アカデミーの学生名簿、W.ターナーのリスト、B.B.A.⁽¹⁴⁾、D.N.B.⁽¹⁵⁾、B.D.S.⁽¹⁶⁾といった人名辞典、大学登録者名簿⁽¹⁷⁾、マンチェスター・クロス・ストリート・チャペルやマンチェスター文芸・哲学協会の名簿⁽¹⁸⁾、書簡⁽¹⁹⁾、伝記⁽²⁰⁾といった史料を主たる手がかりとする。

2. 社会的出自

ウォリントン・アカデミーには貴族・ジェントリ、専門職、実業家の子弟が学んでおり、中には国教会派の聖職者を父に持つ学生もいた。学生の出身地はイングランド内部においても植民地を含めたイギリス全土としてみてもかなり広範囲にわたっていた。

表1 学生の社会的出自 (51/396)

貴族	4	18 (35.3%)
ジェントリ	14	
聖職者(国)	1	17 (33.3%)
聖職者(非)	13	
法律家	1	
医者	2	
貿易商人	6	13 (25.5%)
銀行家	4	
製造業	3	
作家	3	3 (5.9%)
合計	51	

Turner, W., *The Warrington Academy*, Warrington, 1957, pp.51-79.をもとに、人名辞典や名簿から作成。

社会的出自が判明したのは396名中51名(約13%)であった(表1参照)。51名中18名(約35%)が貴族・ジェントリで、17名(約33%)が専門職、そして13名(約25%)が実業家であった。ウォリントン・アカデミーに学んだ学生の中にはマンチェスターのジェントリであったギヤスケル家や貿易商のヒバート家、ポッター家、リバプールの銀行家のヘイウッド家、ロンドンの貿易商のボウガン家などの有力な家系の子弟も多数いた。

表2 学生の出身地

イングランド北部	163	イングランド南部	62
Lancashire	106	Norfolk	9
Yorkshire	35	Somerset	7
Cheshire	17	Devon	2
Cumberland	4	Dorset	2
Westmorland	1	Kent	2
ミッドランド	82	Suffolk	1
Gloucestershire	17	Hampshire	1
Warwickshire	15	Middlesex	37
Staffordshire	13	Scotland	10
Derbyshire	8	Wales	5
Shropshire	8	植民地	52
Leicestershire	7	Ireland	29
Nottinghamshire	4	Jamaica	8
Worcestershire	3	Antigua	5
Berkshire	2	Barbados	2
Hertfordshire	2	Tortola	2
Oxfordshire	2	Nevis	1
Northamptonshire	1	St.Kitts	1
Isle of Man	1	America	4
		イタリア	1
合計	375	不明	21

Turner, W., *The Warrington Academy*, Warrington, 1957, pp.51-79.をもとに、人名辞典や名簿から作成。

次に出身地についてである(表2参照)が、イングランド北西部のランカシャー出身者が106名と最も多く、イングランド北部全体で163名(約41%)を占めていた。ミッドランド諸州では82名(約21%)であり、特に西部と北部が多かった。イングランド南部全体では62名(約15%)であり、ミドルセクスの中でも特にロンドン出身者が35名と集中していた。このように学生の出身地の大多数はイングランド北部、ミッドランド北部と西部、そしてロンドンであった。これらの地域は17世紀半ば以降、長老派とユニテリアン⁽²¹⁾が強固な地盤を確保したと言われていた地域とほぼ重なっている⁽²²⁾。都市別にみるとロンドンが最も多く、そのあとはランカシャーの諸都市が続く。マンチェスターが27名、リバプールが26名、ウォリントンが18名、バーミンガムが14名であった。その他、ノリッジ、チェスター、プ

レストン、ニューカッスルなどを含めて都市出身者がイングランド出身者の半数以上を占めていた。学生の出身地のもう一つの大きな特徴は52名(約13%)の植民地出身者の存在である。学生の中には植民地貿易と関係した貿易商人を父に持つ者もいた。

3. 学生生活

(1) 入学年齢

当初、学生規則⁽²³⁾で定められた入学年齢は14歳以上であった⁽²⁴⁾が、実際に入学した学生の年齢⁽²⁵⁾は非常に幅広いものであった。14、15歳がそれぞれ47名(約23%)と最も多く、以下17歳の36名(約17%)、13、16歳の19名(約9%)、18歳の15名(約7%)と続いている(表3参照)。ウォリントン・アカデミーの入学年齢は13歳から18歳までが中心であり、20代の学生もいた。

表3 学生の入学年齢 (208/396)

年齢	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	合計
学生数	1	1	8	19	47	47	19	36	15	8	4	1	2	208

The Inrollment of Students in the Academy of Warrington Opened October 24 1757, Warrington Academy Papers, Harris Manchester College, Oxford, MS. W/2.3. より作成。

(2) カリキュラム

ウォリントン・アカデミーでは5年間の専門職コースと3年間の実業コースが提供され、学生たちはそれぞれのコースにおいて別々のカリキュラムで学んだ。コースのカリキュラムは29年間で変化しているが、設立当初のコースの内容は以下のようなものであった⁽²⁶⁾。

専門職コースのカリキュラムは諸言語、数学、道徳哲学、自然哲学、文学、神学と幅広いものであった(表4参照)。言語の講義内容にはラテン語やギリシャ語といった古典語だけではなく、英語、フランス語、イタリア語などの近代語も含まれていた。また、道徳哲学の講義では単に倫理的なものだけではなく、法律、経済、政治の分野に関する事柄も提供することになっていた。このコースは種々の専門職を目指す学生を対象にしていたが、5年目は特に聖職志望の学生を主眼においた聖職に就くための準備期間であった。実業コースのカリキュラムは最初の2年間、数学とフランス語に力点を置き、3年目に道徳哲学や自然哲学、宗教などを提供するように編成されていた(表5参照)。このほかにも3年間を通して実業に不可欠な簿記や書き方を毎日、各国の自然誌や行政、産業、宗教、硬貨などを教える地理学⁽²⁷⁾を毎週提供した。また毎週土曜日に課業(Academical Exercise)の時間がコースごとに設けられていた。

表4 専門職コースのカリキュラム

	カリキュラム	備考	土曜日の課業
一年目	諸言語、初級数学	学習の習慣を身につける。自然哲学を学ぶ準備をする。	翻訳、文法、スピーチなど
二年目	諸言語、論理学、中級数学、自然誌、自然哲学への導入	言語の講義において単なる言葉の勉強というよりも、文法を正しくそして美しく使いこなすなど将来の役に立つようにする。	
三年目	自然哲学、道徳哲学	時間と能力が許せば文学と数学の勉強も続ける。	
四年目	道徳哲学	聖職者志望の学生は神学も学ぶ。	
五年目	聖職者志望の学生は職に就く準備として聖職に関する学習を続ける。		

Report of the Progress that has been made in the Establishment of the Academy in Warrington, 1758, Papers Collected by Serjeant Heywood 1754-86, Unitarian College Archives, John Rylands University Library, Manchester, A10. をもとに作成。

表5 実業コースのカリキュラム

	カリキュラム	備考	土曜日の課業
一年目	初級数学 (計算、代数、幾何)、初級フランス語	フランス語の講義では文法とレトリックについて学ぶ。	仏語の英訳、英語でのエッセイ、書簡文体の模写。
二年目	中級数学 (三角法、天文学)、中級フランス語	希望すれば航海術も学ぶことができる。時間と状況が許せば自然哲学も学ぶ。	英語の仏訳、フランス語の手紙の模写、英作文。
三年目	自然哲学、化学、道徳哲学、宗教		道徳、政治、商業に関する論文、仏語訳と英語訳。
三年間を通して	簿記、書き方、製図、デザイン (毎日 1, 2 時間)、地理学 (毎週 1, 2 回)	希望があれば速記も。	

Report of the Progress that has been made in the Establishment of the Academy in Warrington, 1758, Papers Collected by Serjeant Heywood 1754-86, Unitarian College Archives, John Rylands University Library, Manchester, A10. をもとに作成。

学生たちは上述のカリキュラムに沿って通常、専任教師 (Tutor) 3名 (担当科目: 神学、言語と文学、数学と自然哲学)、非常勤講師⁽²⁸⁾ 2名 (化学・解剖学、商業科目)、外国人教師⁽²⁹⁾ 1名 (外国語) の計6名に学んだ。そして各科目ごとに教師に授業料を支払った。アカデミーが開校していた29年間で総勢18名の教師がアカデミーで教鞭を執った。以下、教師たちについて簡単に述べておく⁽³⁰⁾。専任教師は、会員や教師から推薦された⁽³¹⁾候補者の中から、運営委員会 (Committees) によって選ばれた。教師の選考基準は専任教師が担当するそれぞれの分野で非常に高い能力を備えており、かつ人格も優れていることであった⁽³²⁾。専任教師のほとんどが長老派の聖職者でありユニテリアンであった。また教師の多くは教育活動に従事するのみならず、地域社会のなかで、科学・文芸協会での活動、公的プロジェクトへの参加、啓蒙知識人としての出版活動など様々な活動を行っていた。学生たちはこうした教師た

ちから上述のカリキュラムの内容を学ぶだけではなく、週末や自由な時間に教師がひらくお茶会に参加し、わからないことを尋ねたり、教師の若い頃のエピソードなどを聞いたりした⁽³³⁾。

(3) 学生生活

ウォリントン・アカデミーでの生活について1778年に入学したある学生を例にとり、みていく⁽³⁴⁾。アカデミーでの生活は朝7時のお祈りで始まった。8時から講義開始。9時前に朝食をとり、9時から講義再開。午後1時までの講義の後、1時間昼食をとり、その後は4時または6時まで講義。休憩したあと課外活動の時間が1時間設けられていた。課外活動として文法、演説、読書、古典、神学などの各クラブがあった。午後8時から9時までに夕食を済ませ、お祈りをして就寝。これが月曜日から金曜日まで続き、土曜日は午前中だけ講義と課外活動があり、日曜日は午前中の礼拝

以外は自由であった。平日のお祈りはアカデミーで行っていたが、日曜日の礼拝に関しては両親または保護者が決めた教会であればこの礼拝に参加してもよかった。これは特定の宗派ではなくあらゆる宗派の子弟が入学できるようにするためであり、入学に際して宗派に関する審査も行われていなかった。実際、長老派やクエーカーなどの非国教徒だけではなく国教徒も入学した。とはいえ大多数が非国教徒であり、特に長老派との関係が深かった。例えばマンチェスター出身の学生26名についてみると、長老派の教会であり、当時ユニテリアンの拠点の一つとなっていたマンチェスター・クロス・ストリート・チャペルの信託委員を親族が務めていた学生も多く、14名の学生が、後に信託委員となった⁽³⁵⁾。

学期の始まりは毎年9月1日と決まっており、7月と8月は夏期休暇であった。この時期ほとんどの学生が自宅へ帰り⁽³⁶⁾、中には友人の家に遊びに行ったり⁽³⁷⁾、旅行をしたりする学生もいた。

アカデミーでは学生規則が定められており、礼儀正しさや慎み深さといった態度や振る舞い、マナーを身につける事が期待され、賭博や借金、夜間外出や無許可の外泊などを禁止されていた。学生たちは一週間ごとにこれらの規則に違反していないかを調査された。もし違反した場合は、毎週土曜日に指導責任者（Rector）⁽³⁸⁾によって皆の前で名前と違反内容が読み上げられ、指導責任者と教師によって訓戒と叱責が行われた。それでも改善されない場合は宿題が課せられた。最も厳しい処分としては退学になることもあり、実際少なくとも5名の学生が不道徳や規則違反を理由に退学処分となっている⁽³⁹⁾。違反記録は三カ月ごとに運営委員会に報告され、運営委員会は保護者に連絡した⁽⁴⁰⁾。

学生の道徳指導はアカデミー設立構想の時から重視されており、教師や理事会は特に宿舎や日常生活における学生指導に力を入れていた。にもかかわらず、実際には、夜アカデミーを抜け出し牛の毛皮をかぶり住民を驚かした学生もいた⁽⁴¹⁾。ほかにも旅館の看板にいたずら書きをしたり、熊の毛皮をかぶり住民を驚かしたり、数名で悪魔の格好をして舞踏会帰りの女性を驚かした学生もいた。さらに多額の費用を浪費する学生もいた。こうした学生のいたずらや浪費は指導責任者や理事たちをしばしば悩ませ、親たちを怒らせた⁽⁴²⁾。

学生たちの不道徳や浪費がアカデミーへの支持を低下させ閉鎖へと導いた主要な原因として様々な先行研究で述べられている⁽⁴³⁾が、学生たちのそうした行動を抑制できない原因の一つとして、1783年に教師であったギルバート・ウェイクフィールドは次のように述べている⁽⁴⁴⁾。

「学生たちはこの施設において全ての自由と自己管理が許されています。学生たちはこの大きな独立した家で、ほんの少しかもしくは全く教師から監督されない状況にあります。（中略）しつけを厳しくすることは、学生の隔離された居住という理由のために適切に維持できないのです。」

このように、ウェイクフィールドは学生たちが好き勝手に振舞う原因の一つとして、教師がいない独立した宿舎に学生たちが住んでいることを指摘している。学生は当初、教師の家か近所に下宿していたが、1762年に同じウォリントン市内にアカデミーが移転してからは、学生は宿舎の世話人兼管理人であったリグビー夫妻⁽⁴⁵⁾と共に敷地内の宿舎で過ごした。リグビー夫妻には二人の娘がおり、多くの学生が彼女たちに恋し、そのことは理事会でも問題視された。結局リグビー夫人が体調を崩し、彼女たちもアカデミーを去ることでこの問題は解決された⁽⁴⁶⁾。学生の中には教師や友人の娘や姉妹と恋に落ち、結婚した人も少なからずいた⁽⁴⁷⁾。

学生の素行の悪さが問題となる一方で、教師の深い愛情に感謝するものや、アカデミーで学んだ科学的学問に楽しみを見出す学生もいた。パラムの男爵でウォリントン・アカデミーの初代校長であったウイロビ卿の後を継ぐことになるジョージ・ウイロビはアカデミーの書記であり、一時期教師でもあった。セドンの「愛情がこもった行為に」感謝し、「多大なる喜びとともに」アカデミーに帰る旨を記した手紙を休暇先から送っている⁽⁴⁸⁾。また後にルナ協会やその他の科学に関する協会の会合に積極的に参加したR. ブライトはアカデミーでの授業を通して科学に傾倒するようになったことや、ウォリントン・アカデミーでのベンジャミン・フランクリンの換気や埃に関する講演やジョセフ・バンクスのキャプテン・クックに随行した際見た珍しい植物についての講演について後に家族に語っている⁽⁴⁹⁾。

アカデミーで学ぶのには、寄宿料、部屋代、授業料、生活費が必要であり、かなり高額なものであった。例えば1766年の寄宿料は十ヶ月につき二人部屋で15ポンド、一人部屋で17ポンドであった⁽⁵⁰⁾。寄宿料にはシーツとテーブルクロス以外の洗濯代、薪、ロウソク、紅茶代は含まれていなかった。また寄宿料の他に部屋代が必要であった⁽⁵¹⁾。部屋代は部屋の場所や家具によって異なっており、26部屋のうち17部屋が2.2ポンド、8部屋が3.3ポンド、1部屋が4.4ポンドであった。これらの料金はいずれも学期中のことであり、二ヶ月の休暇もアカデミーに残る場合にはさらに料金が必要であった。宿舎に関する費用として一年間でおよそ18ポンドから23ポンド支払わなければならない、その他にも生活

費と授業料も必要であった。ウォリントン・アカデミーの学生一人にかかる金額は年間50ポンドで家族を養っていたといわれている労働者階級の人々⁽⁵²⁾にはとうてい支払えない金額であり、社会的出自からも判るとおり、かなり裕福な家庭でなければ子弟を通わせることは不可能であった。しかしながら聖職志望の学生の場合には貧しくてもアカデミーに通う道が開かれていた。聖職志望で入学時にアカデミーの課す試験に合格した学生には授業料が免除された。また、当時、各宗派ごとに自宗派の聖職者養成のための基金が設立されており、基金から奨学金を得ることもできた。実際、ウォリントン・アカデミーでは20名以上の聖職志望の学生が基金から奨学金を受けていた⁽⁵³⁾。

こうした学生生活を専門職コースの学生は5年、実業コースの学生は3年間続けることになっていたが、実際は学生の多くがコース途中でアカデミーを去った。

表6はどちらのコースで学んでいたかは定かではないが在学期間が判明した97名(約25%)の学生についての表である⁽⁵⁴⁾。表6によると7割もの学生が1年間か2年間でアカデミーを去っていた。表7は97名のうち学んでいたコースが判明した⁽⁵⁵⁾46名の学生の在学期間を示したものである。専門職コースについては14名全員が聖職志望の学生であるが、彼らのうち5年間学んだのはわずか2名であった。また1年間でアカデミーを去った学生が最も多かった。実業コースの学生で在学期間が判ったものは32名いたが、その内3年間学んだ学生は6名と最も少なかった。半数以上が2年間でアカデミーを去っていた。

表6 学生の在学期間 (97/396)

在学期間	一年	二年	三年	四年	五年	合計
学生数	33	39	17	6	2	97

The Inrollment of Students in the Academy of Warrington Opened October 24 1757, Warrington Academy Papers, Harris Manchester College, Oxford, MS. W/2,3. より作成。

表7 コースごとの在学期間 (46/396)

入学期間	一年	二年	三年	四年	五年	合計
専門職コース ⁽¹⁾	5	0	3	4	2	14
実業コース	9	17	6			32

(1) 聖職者志望のみ判明

The Inrollment of Students in the Academy of Warrington Opened October 24 1757, Warrington Academy Papers, Harris Manchester College, Oxford, MS. W/2,3. より作成。

4. 進 路

ウォリントン・アカデミーで学んだ学生の多くがア

カデミーの目的通り、実業界と専門職の道に進んだ。中には大学に進学する学生も少なからずいた。

全学生396名のうち進路が判明したのは263名(約66%)であった(表8参照)。最も多くの学生、すなわち107名(約27%)の学生が進出した分野は実業界であった。次に多かったのは聖職の58名(約14%)、続いて法律関係の24名(約6%)、貴族・ジェントリの21名(5%)、医業関係の20名(約5%)、陸軍の17名(約4%)であった。専門職に従事した学生と実業家になった学生とを比較すると、専門職に就いた学生が102(約26%)、実業家になった学生が107名(約27%)とほぼ同数であった。進路が判明した263名中およそ8割がアカデミーの目的通りの進路に進んだことになる。

実業の道に進んだ107名のうち最も多くの学生が貿易商人になった。貿易商人の中にはニューカッスルの治安判事になったI. クックソン、代々プリストルの市長を務めた家柄で兄もプリストル選出の庶民院議員となったR. ブライト、ロンドンでジャマイカ貿易をしていたW. ボウガン(ロイヤル・ソサイエティ会員:F.R.S.)、クエーカー教徒でありルナ協会のメンバーであったS. ガルトンらが出た。銀行家には陶磁器で有名なジョサイア・ウエッジウッドの長男ジョンやアイルランド銀行の取締役となったジョン・L・マクウェイ、マンチェスター銀行を設立したベンジャミン・A. とナザニエル・ヘイウッド兄弟などがいた。製造業者の一人は教師であったJ. プリーストリーの義理の弟にあたる鉄工場主のW. ウイルキンソンであった。

法律関係では最も多くの学生が法廷弁護士となり、中には行政に携わる者もいた。例えばS. ヘイウッドはウエールズの裁判長、I. バーはカルカッタの最高法院のセクレタリー、J. クラークはエディンバラのシェリフ、S. ベンヨンはチェスターの司法長官を務めた。

医業関係に就いた学生のうち最も多かったのは内科医であった。その中にはマンチェスター文芸・哲学協会の創設者であり、ウォリントン・アカデミーの後身であるマンチェスター・アカデミー⁽⁵⁶⁾の初代校長ともなったT. パーシバル、F.R.S. のC.H. パリーらが出た。外科医のE. リグビィはノリッジの市長も務めた。

聖職の道に進んだ学生のうち非国教会派の聖職者が40名、国教会派の聖職者が18名であった。国教会派の聖職者になった者の中にはN. アレクサンダーのように主教にまで登りつめたものや、W. クックソンのように聖堂参事会会員になったものさえいた。非国教会派の聖職者にはマンチェスター・アカデミーの教師になったT. パーンズやR. ハリソン、I. クックソンらと共にニューカッスル文芸・哲学協会の設立や運営に尽力したW. ターナーらが出た。

表8 学生の進路とその内訳

進路	人数	内訳
実業	107	商人：32名；銀行家：7名；製造業者：2名；不明：66名
聖職	58	非国教会派：40名；国教会派：18名（退学者：1名）
法律関係	24	法廷弁護士：9名；事務弁護士：7名；その他：5名；不明：3名
医業関係	20	内科医：10名；外科医：3名、不明：5名；アカデミーを出たあと勉学途中で死亡：2名
軍隊(陸軍)	17	
貴族・ジェントリ	21	ジェントリ：6名；准男爵：6名；男爵：1名；不明：8名
その他	9	著作家や政治家など
死亡(在学中)	7	
不明	133	退学：4名；アカデミーや大学を出たあと大陸旅行中に死亡：2名；西インド植民地出身者：18名；北米植民地出身者：2名
総数	396	

Turner, W., *The Warrington Academy*, Warrington, 1957, pp.51-79.をもとに、人名辞典や名簿から作成。

軍隊に入った学生17名全員が陸軍に入隊した。その中にはジェントリの相続人と結婚して自らジェントリとなるものもいた。彼らの最高位が男爵であり、ほとんどがジェントリか准男爵であった。

その他にはホイッグの庶民院議員で非国教徒弾圧法撤廃運動に尽力した H. ビューフォイ、同じく庶民院議員で B. フランクリンとも親交が深かった B. ボウガン、有名な鉱物学者でありアカデミーの外国人教師であった J.R. フォスターの長男で、父とともにキャプテン・クックの旅行に随行し後に自然学者になった J.G.A. フォスター、政治経済学者であった M.T. ロバートらが出た。

ウォリントン・アカデミーを出たあと、一部の学生は大学や法学院に進学した。表9は学生の進学先と進路の関係を示したものである。大学や法学院に進学した学生は51名（うち複数の大学や法学院に進学した学生が11名いた）であった。51名中42名が専門職に就いており、その内訳は国教会派の聖職者18名中14名、非国教会派の聖職者40名中6名、法律関係24名中10名、医業関係20名中12名であった。専門職に就いた学生102名の学歴が全て判明したわけではないが、少なくとも

102名のうち42名（約41%）の学生が大学や法学院に進学した。

表9 学生の進学先と進路との関係

	聖(非)	聖(国)	法律家	医者	ジェントリ	商人	不明	合計
ケンブリッジ	1	9 ⁽¹⁾	7	0	2	1	3	23
オックスフォード	0	6	0	0	0	0	0	6
エディンバラ	0	0	0	12	1	1	0	14
グラスゴウ	5	1 ⁽¹⁾	0	0	0	0	1	7
ライデン(蘭)	0	0	0	3 ⁽²⁾	0	0	0	3
ドイツの大学	0	0	0	0	0	1	0	1
法学院	0	0	9 ⁽³⁾	0	0	0	0	9

(1) 1名がオックスフォード大学出身

(2) 全員エジンバラ大学出身

(3) 6名がケンブリッジ大学出身

Turner, W., *The Warrington Academy*, Warrington, 1957, pp.51-79.をもとに、人名辞典や名簿から作成。

5. ま と め

以上、ウォリントン・アカデミーの学生について社会的出自、学生生活、進路といった観点から明らかにしてきた。

アカデミーには幅広い年齢層の若者がイギリス全土から集った。宗派も限定されず、非国教徒の子弟も国教徒の子弟も入学した。中には国教会聖職者になり、主教にまでなった者もいた。

とはいえ、アカデミーで学ぶには高額の寄宿料、部屋代、授業料、生活費が必要であったため、裕福な家庭の子弟でなければアカデミーで学ぶことはできなかった。貧しい人がアカデミーで学ぶ道も用意されていたが、優秀で聖職者を目指す若者に限定されていた。アカデミーの目的は、将来、専門職や実業の道に進む学生を「若きジェントルマン」として育成することであり、労働者の人々はその対象には入っていなかったのである。アカデミーは「あらゆる人々」に門戸を開くとしていたが、アカデミーが対象とした「あらゆる人々」は、出身地や宗派の点では限定されていなかったけれども、「若きジェントルマン」となる裕福な子弟もしくは聖職者を目指す学生に限られていた。

アカデミーでは学生たちの教科指導だけではなく道徳・生活指導にも力を入れていた。そのためアカデミーにおける生活では規則正しくマナーを守ることが重視されていた。しかし学生のなかにはいたずらをし、浪費をし、恋をし、教師や理事、親たちを心配させ、時に怒らせた者もいた。一方で教師たちの愛情のこもった教育に感謝する者や、アカデミーで学んだ科学に楽

しみを見出す者もいた。

アカデミーでは5年間の専門職コースと3年間の実業コースが提供されていたが、実際には学生の多くが最後まで学ぶことなくアカデミーを去った。

進路が判明した学生263名のうち約8割の学生がアカデミーの目的通り実業界と専門職の分野に進出した。学生の中にはアカデミーを出たあと大学や法学院に進む者もあり、オックスブリッジに進学する者さえいた。

本論文はこれまで部分的・個別的な分析しかされてこなかったウォリントン・アカデミーの学生を幅広い観点から具体的に明らかにした。今後は、パブリック・スクールやオックスブリッジの学生、スコットランドの諸大学の学生との比較によって学生を相対化していくことや、学生だけに焦点を当てるのではなく、教師や運営陣、保護者、学生の四者の視点からアカデミーの教育を明らかにしていくことが課題である。

注

- (1) 設立の経緯、組織形態に関しては、拙稿、「ウォリントン・アカデミー(Warrington Academy, 1757-86年)の設立—J.セドンの活動を中心に—」『日本の教育史学』第44集、2001年(以下「セドン」と略す)を参照のこと。
- (2) 小西恵美「18世紀イギリス都市社会分析のための視点、「公域」と「都市エリート」—キングス・リンを中心に—」『三田商学研究』42-4、1999年、渡辺有二「十八世紀イギリス・ジェントルマンの変容」岡本明編著『支配の文化史—近代ヨーロッパの解読—』ミネルヴァ書房、1997年。Borsay, P., *The English Urban Renaissance; Culture and Society in the Provincial Town, 1660-1770*, Oxford, 1989; Clark, P., *British Clubs and Societies 1580-1800*, Oxford, 2000.
- (3) 田中實『公益法人と公益信託』勁草書房、1980年、宮腰英一『十九世紀英国の基金立文法学校—チャリティの伝統と変容—』創文社、2000年、森泉章編著『イギリス信託法原理の研究』学陽書房、1992年を参照。
- (4) 長谷川貴彦「イギリス産業革命期における都市ミドルクラスの形成—バーミンガム総合病院1765~1800年」『史学雑誌』105-10、1996年には非国教徒が公共の利益のために活動していることを主張し、非国教徒弾圧法の撤廃を訴えたことが述べられている。
- (5) 'Rules, Proposed as Proper to be Observed, for the Better Regulation of Proceedings, in the Affair of the Academy, Now de Ending, n.d.', Papers Collected by Serjeant Heywood 1754-86 (以下 PCSH と略す), Unitarian College Archives (以下 UCA), John Rylands University Library, Manchester (以下 JRUL M), A10.
- (6) 拙稿「セドン」157-158頁。
- (7) 'Proposals for Carrying into Execution, A Plan for the Liberal Education of Youth, by Instructing them in the Most Important Branches of Literature, as well as the Principles of Religion and Liberty, Manchester, 1954', (以下 Proposals と略す) PCSH, UCA, JRUL M, A10.
- (8) 'Robert Andrews to John Seddon, 11 May 1753', John Seddon Papers (以下 JSP), Harris Manchester College, Oxford (以下 HMCO), MS.S / 1, fol.9.; Proposals.
- (9) 非国教徒が公職につくために国教会派の教会で礼拝するという「時宜的国教遵奉」が広く行われ、また公職についていても免責法によって罰を免れることが一般的に行われていた。
- (10) アカデミーの学生名簿(注12)と出身者の W. ターナーがおこなった追跡調査リスト(注13)の二つが学生に関する基本史料である。これらには多少の違いがみられ、学生名簿にある3名の記録がターナーのリストにはなく、逆にターナーのリストにある5名の記述が学生名簿にはない。どちらがより正確なのかは論者には判断できないのでここでは二つの史料に書かれている396名全員を対象にして分析した。
- (11) *The Inrollment of Students in the Academy of Warrington Opened October 24 1757* (以下 The Inrollment) Warrington Academy Papers, HMCO, MS. W / 2,3.
- (12) 'Historical Account of Students Educated in the Warrington Academy' Turner, W., *The Warrington Academy*, Warrington, 1957. (Reprinted from *Monthly Repository*, 1813-15)
- (13) 著名な学生について個別的な記述を行っているものは以下の通り。Crippen, T.G., *Early Nonconformist Academies, Transactions of Congregational Historical Society*, June, 1914 は進路別の人数についても記し、代表的な学生のリストを載せている。Fulton, J., 'The Warrington Academy (1757-1786) and Its Influence upon Medicine and Science', *Institute of the History of Medicine*, 1-2, 1933; Simon, B., *Studies in the History of Education, 1780-1870*, London, 1960. (成田克矢訳『イギリス教育史 I』亜紀書房、1977年)。進路を分析しているものは以下の通り。McLachlan, H.,

- Warrington Academy; Its History and Influence*, Manchester, 1943. (以下 *Warrington Academy*) はアカデミー出身者の多くが関わった団体の活動も明らかになっている。O'Brien, P., *Warrington Academy 1757-1786: Its Predecessors and Successors*, Wigan, 1989; Do, *Warrington Academy: students admitted 1757-1782*, *Manchester Memoirs*, 128, 1988 / 89 にはアルファベットリストも載せてある。その他、学生のいたずらや浪費について具体的なエピソードや親の反応などを書簡を用いて明らかにしたのが Bright, H.A., *A Historical Sketch of Warrington Academy*, Liverpool, 1859 である。いくつかの文献で出身地にも触れてあるがイングランド北部が多かったことと植民地出身の学生がいたことが指摘されているだけである。なおウォリントン・アカデミーに関する先行研究の整理については、拙稿「ウォリントン・アカデミー (Warrington Academy, 1757-86) の新たな研究に向けて」『化学史研究』26-2、1999年を参照のこと。
- (14) Saur, K. (ed.), *The British Biographical Archive, 1601-1929*, London and Munich, 1984 は、1601-1929年に出版された人名事典300点からおおよそ25万人、45万項目の伝記記事を収録したもの。
- (15) Smith, G., *Dictionary of National Biography*, London, Vol.1-26, 1917-1961.
- (16) Williams, T.I. (ed.), *A Biographical Dictionary of Scientist*, London, 1982.
- (17) Foster, J., *Alumni Oxonienses; The members of the University of Oxford, 1715-1886*, vol. II, Nendln, 1968; Venn, J.A., *Alumni Cantabrigienses, part II, 1752-1900*, vol. VI, Cambridge, 1951.
- (18) Baker, T., *Memorials of A Dissenting Chapel, Its Foundation and Worthies; Being a Sketch of The Rise of Nonconformity in Manchester and of the Erection of The Chapel in Cross Street, with Notices of its ministers and Trustees*, London, 1884; Literary and Philosophical Society, Manchester, *Memoirs of the Literary and Philosophical Society of Manchester ...3 vols.* Warrington and London, 1785-90.
- (19) JSP, HMCO, MS.S / 1, fol.1-222.
- (20) Bright, P., *Dr. Richard Bright, 1789-1858*, Bristol, 1983; Priestley, J., *Memoirs of Dr. Joseph Priestley, written by himself*, London, 1904. (Reprinted from three edition of 1809)
- (21) ユニテリアンを明確に定義するのは難しいが、三位一体説を否定したアリウス主義者とソツツイーニ主義者を総称してこの時期ユニテリアンと呼んだ。彼らは明確な教義を持たず、真実を自ら探求し検証することを重視した。そのためユニテリアン主義は国教会を含めあらゆる宗派に浸透した。特に長老派に深く浸透したといわれている。1774年、セフィロス・リンゼイによってロンドンに最初のユニテリアンの教会が設立されるまでは、長老派の教会でありながら聖職者や信者がほとんどユニテリアンであったマンチェスターのクロス・ストリート・チャペルのような教会が各地に存在した。
- (22) O'Braien, P., *op. cit.*, pp.35-42. 山本通「イングランドの工業化と宗教」梅津順一、諸田實編著『近代西欧の宗教と経済—歴史的的研究—』同文館、1996年。
- (23) 'The Laws', *Report of the Warrington Academy by the Trustees at their Annual Meeting* (以下 *Report of the W.A.* と略す), 1763, HMCO.
- (24) *Report of the Progress that has been made in the Establishment of the Academy in Warrington with an Abstract of the Laws for the Government of the Students* (以下 *Report of the Progress* と略す), 1758, PCSH, UCA, JRUL M, A10; Turner, W., *op. cit.*, p.28. 学生数増加を狙ってその後入学年齢が引き下げされた。
- (25) 入学年齢が判ったのは1757年から1771年までの入学者209名のうち208名であった。アカデミーの書記であったJ. セドンは学生の名前、出身地、入学年齢、入学期日、退校期日、入学金の金額など詳細に記録していたが、1771年以降W. エンフィールドが書記になってからは名前と出身地のみになった。
- (26) *Report of the Progress*.
- (27) 1767年にJ. プリーストリーが言語と文学の教師として赴任し、歴史と共に地理学を教えるまでは、自然哲学の教師が地理学を教えていた。
- (28) 非常勤講師が雇われたのは1763年以降であり、1758年の段階では簿記や書き方などの教科は実際にはまだ教えられていなかったと思われる。
- (29) 学生数増加を目的として採られた方策の一つとして1767年から外国人による外国語の教授が始まった。
- (30) 教師については拙稿(田中真貴子)「ウォリントン・アカデミー (1757-86年) の教師たち—経歴と活動を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』43-1、1997年を参照のこと。
- (31) Bright, H.A., *op. cit.*, pp.6-7. 実際の推薦状として、'Bernard Bischoff to (?Daniel) Bayley, 6 Jul. 1754', JSP, HMCO, MS.S / 1, fol.25.
- (32) Turner, W., *op. cit.*, p.4.
- (33) *ibid.*, p.20.

- (34) McLachlan, H., *English Education under The Test Acts; Being the History of Non-Conformist Academies 1662-1820* (以下 *English Education* と略す), Manchester, 1931, p.227.
- (35) Baker, T., *op. cit.*, pp.69-135.
- (36) 学生名簿によると自宅へ戻りそのままアカデミーに戻ってこない学生もおり、中には授業料を支払わないまま帰ってしまった学生もいた。
- (37) Bright, P., *op. cit.*, pp.15-16.
- (38) 指導責任者はアカデミーの書記が兼ねた。
- (39) *The Inrollment*.
- (40) Turner, W., *op. cit.*, p.35.
- (41) Bright, H.A., *op. cit.*, pp.23.
- (42) *ibid.*, pp.22-27.
- (43) *ibid.*, p.28.; McLachlan, H., *Warrington Academy*, pp.102-104.; O'Braien, P., *op. cit.*, p.107.; Turner, W., *op. cit.*, p.36 などを参照。
- (44) タイトルなし。PCSH, UCA, JRUL, M, A10.
- (45) 1780年に夫妻が管理人を辞めた後は W. エンフィールドが10ヶ月につき17ポンドで学生の世話をした。
- (46) Bright, H.A., *op. cit.*, p.22.
- (47) 例えば R. ブライトは同級生であったサミュエル・ヘイウッドの家に休みのたびに遊びに行き彼の妹と恋に落ち、結婚した。Bright, P., *op. cit.*, pp.15-16.
- (48) Bright, H.A., *op. cit.*, p.14.
- (49) Bright, P., *op. cit.*, pp.14-15.
- (50) *Report of the W. A.* (1766). 寄宿料金は19年間で変化した。例えば1767年には一人部屋が18ポンドで一人部屋が21ポンドであった。
- (51) *Report of the W. A.* (1768).
- (52) 長島伸一『世紀末までの大英帝国』法政大学出版局、1987、70-75頁。
- (53) Alan, P.F.S., 'Philosophy in the Eighteenth-Century Dissenting Academies of England and Wales', *History of Universities*, 1992, p.83; McLachlan, H., *Warrington Academy*, pp.38-39; Do, *English Education*, p.224.
- (54) 学期の始まる9月から次の年の6月までの10ヶ月間を1年とした。
- (55) 1757-71年に入学した学生の記録をみると、一部の学生の名前の後に「D」「FD」「EC」と書き込まれていた。「D」は聖職者志望の学生、「FD」は聖職者志望の学生で授業料を免除された学生、「EC」は実業コースの学生だと考えられる。209名中「D」または「FD」の書き込みがあった学生が24名、「EC」の書き込みがあった学生が40名であった。なぜ書き込みがされた学生とされなかった学生がいたのかは定かではない。
- (56) 現在のオックスフォード大学のハリス・マンチェスター・カレッジである。